

[ここに入力]

題字の写真は、北海道の旭岳です。大雪山連峰の主峰で、標高 2,291m。北海道最高峰。9 月には、日本で最も早く紅葉が訪れる場所の一つとして有名です。天女ヶ原の湿原や姿見の池周辺に咲く高山植物が人々を魅了します。

紅葉台



新聞

第 85 号

2023 年

7 月 8 日

発行人：関谷 孝

粕谷和夫の観察日記

群馬県玉原高原の自然



タムシバ

ブナの巨木が林立する「ブナ平」では、新緑のブナ林がどこまでも続き、コブシに似たタムシバの白い花のアクセントが見事でした。

♥ タムシバは、日本固有種です。コブシは花の裏に 1 枚葉が付いているので区別するようです。

ウリハダカエデとムシカリの花

玉原高原のブナ林を歩いているとたくさんの花々に出会います。ウリハダカエデの新緑の展開中の花がいかに新鮮です。

ムシカリは、「オオカメノキ」が正式名称ですが、葉が虫に食われやすいことから「虫刈」と呼ばれます。新緑期の今は、葉が全く虫に食われてなくとても綺麗です。

♥ ウリハダカエデは、幹がマクワウリのような色をしていることから名前が付いたようです。新緑の頃の爽やかな芽吹きは森林浴になりますね。



囀るアオジ（上）とキビタキ（下）

アオジが目の前に来てさえずる姿を見せてくれました。キビタキも一度だけ近くに来てくれました。アオジが止まっている枝は、未だ冬芽。キビタキの枝は新葉が展開途中です。（5 月中旬）

山ガール、小松由佳さんと呼ぶ

赤坂春江さん 玉田洋子さん

紅葉台新聞の読者で山ガール「高尾すみれ会」の皆さん（8 名）が小松由佳さんの講演会を行いました。もともと登山が趣味の皆さんがコロナ禍になってより山に行くことを楽しむようになり、会が出来てもう 5 年目になります。紅葉台新聞（64 号）で小松さんを紹介したことから、K2（世界 2 番目の高峰）を日本人女性で初めて踏破した話を聞きたいと計画しました。新聞から繋がり自分たちで取り組んだことは素晴らしいですね。



すみれ会は、1 年間の登山計画を立て、全員で月 1 回定例山行があります。また、都合のつく人で毎週 1 回平日に山歩きを楽しんでいます。山に惹かれる理由を聞いてみました。赤坂さんは、生まれが福島で小学校に通うのに山を越えて 1 時間も歩いて通ったそうです。東京で就職してからは、「山の会」に入って登山を始めました。

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」の HP に公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしております。

玉田さんはハイキング程度の経験しかありませんでしたが、8 年前に赤坂さんに誘われ、イタリアのドロミティ一山脈をトレッキングするグループツアーに参加しました。ここは、世界遺産になるほど荒々しい岩肌が特徴で美しい景観です。そのため世界各地から登山者が訪れます。ここで意気投合。山友達になりました。



これまで登った山で印象深いのは、北海道の大雪山、旭岳。北海道の最高峰で大雪山国立公園にあります。アイヌ語で「カムイミントラ（神々の遊ぶ庭）」と呼ばれ、雄大な景観が特徴です。火山のため岩山ですがその麓は高山植物の宝庫。壮大なお花畑が広がります。エゾノツガザクラやチングルマが見渡す限り満開で圧巻でした。立山の室堂平は、夏に行ったそうですが、天気が最高で、展望が素晴らしく、高山植物の花園や浄土山での雷鳥も



見る事が出来ました。特に、雄山、大汝山からの展望が素晴らしかったとのこと。山は登った人でないと実感できない魅力があるのですね。

小松さんの話で印象に残ったのは、人並み以上の努力家で自分が決めたことは貫く精神力の強さです。それを物語る逸話ですが、東海大学の山岳部で厳しい訓練と共に心身が鍛えられたことです。登山の訓練として毎日のように丹沢の山小屋へ荷物を背負って歩いて運ぶ「歩荷（ぼっか）」をしていました。自分と同じ体重の荷物を運ぶのでついには背中に巨大な歩荷こぶが出来ました。あまりにも大きいので東海大学に標本として残っているそうです。

そんな苦しい思いをしたからこそ K2 に登って九死に一生を得て帰還することが出来たと話していました。しかしなぜそんなにも苦しい思いをするのか。「それは生きていることを実感する。それも生還しないと意味がない」と話してくれました。シリアに行って危険な目にあって写真も撮り続ける原動力になっているのは、この体験があるからなんですね。

話を聞くだけでも驚きの連続です。参加者からも「小松さんの生きるという意味深い体験談、過酷な挑戦をきれいごととして語るのではなく、実体験の本音や裏話を聞いて登山家としての哲学がじわーっと伝わってきました。参加して本当に良かった！！・・・」（抜粋）

そんな話を私関谷の家の憩いの場に来てじっくりと聞きました。皆さんも是非憩いの場にいらして楽しい話をしませんか。【文責 関谷】